

出エジプト記1章「世から受ける苦しみ」

1A はじめに

1B モーセ五書の中の流れ

2B 世の象徴

3B 構造

2A 民に対する主の真実 1-7

3A 世の王による虐げ 8-22

1B 苦役 8-14

2B 男の子の殺害 15-22

本文

1A はじめに

1B モーセ五書の中の流れ

それでは、私たちはこれから出エジプト記を読んでいきたいと思います。出エジプト記のヘブル語の題は、「さて、名が次の通りである」というものです。この1節にある、初めの言葉がそのまま採用されています。つまり著者であるモーセは、創世記と出エジプト記を別の話として書いたのではなく、一連の続きとして書いています。律法、トーラと呼ばれているものは、モーセによって記された「モーセ五書」と呼ばれているのは、それが理由です。レビ記も、モーセが幕屋を建てた後に語られた言葉であり、民数記は、その後、人口調査をしてそれぞれの部族に成年男子が何人いるのかというところから始まり、そして申命記は、ヨルダン川の向こう岸、モアブの草原でモーセが説教した言葉になっています。私たちはとかく、話をぶつ切りにして聞いてしまいがちですが、これら一連の流れに、神さまの素晴らしい救いのご計画があるのです。

2B 世の象徴

出エジプト記は、神の救い、また贖いの土台になっている話です。その後に起こるすべての原型になっている話です。アブラハムの子孫に起こったことが、ついにイエス様ご自身にも起こって、そしてイエスを信じる者たちにも起こるのだということです。

エジプトは、「世」の象徴です。この世を表しています。この世において生きている者たちが、神によって贖い出されて、神の所有の民となります。けれども、その時に必ず荒野を通ります。荒野の中で、自分はただ神によってのみ拠り頼むことを学びます。ただ神によってのみ生きているのだと分かったからこそ、御霊によって約束のものを手にする働きをすることができます。ヨシヤアたちの約束の地における戦いです。イエスご自身が、幼児の時にエジプトに避難して、それからイスラエルに戻るも、四十日間の断食で、荒野におられました。イスラエルの神は、キリストにあって今でも、

私たちを世から贖い出し、荒野の生活において訓練し、そして御霊によって、信仰によって約束のものを手に入れる生活へと導かれます。

したがって、今晚学ぶ 1 章は、この世における苛酷さ、その虐げについて見ていくことができるというものです。

3B 構造

出エジプト記全体は、大まかに二つの部分に分れますね。一つは、1 章から 18 章まで、出エジプトであります。神が力をもって、イスラエルの民を贖い出されて、ホレブの山のところまで導かれる箇所です。そして 19 章から 40 章までにおいて、ホレブにおける神の栄光の現れであります。添いのシナイの荒野の山において、主が十戒を始めとする掟を与えられ、ご自分がイスラエルの民の間で住まわれるため、幕屋を造ることを命じられました。そこに栄光の雲が満ちるところで、出エジプト記は終わります。私たちは、先日のカルバリーチャペル日本カンファレンスで、「神の栄光」というテーマで、学びましたね。私たちは続けて、そのテーマを後半において味わうことができます。

2A 民に対する主の真実 1-7

では、1 節から 5 節までを読んでみましょう。

1 さて、ヤコブとともに、それぞれ自分の家族を連れてエジプトに来た、イスラエルの息子たちの名は次のとおりである。2 ルベン、シメオン、レビ、ユダ。3 イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン。4 ダンとナフタリ。ガドとアシェル。5 ヤコブの腰から生まれ出た者の総数は七十名であった。ヨセフはすでにエジプトにいた。

私たちは、創世記の話を思い出すことができます。それは、神がアブラハムを召し出して、「わたしが示す地に行きなさい。あなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。(12:1-3 参照)」と言われました。そしてアブラハムがカナンの地に行き、そこでイサクを生みました。イサクによって、神はアブラハムの祝福を与えようと言われました。そしてイサクは、ヤコブを生みました。ヤコブにも、その大いなる祝福の約束をされました。そしてヤコブに、十二人の息子が生まれたのです。

その一人がヨセフです。ヨセフは、夢を見て、自分に対して兄たちがひれ伏し、また父も母もひれ伏すようになるという夢を見ました。兄たちは妬み、弟を奴隷としてエジプトに売ったのです。けれども、主はヨセフと共におられました。ヨセフはファラオの侍従長のしもべとなり、そこで侍従長ポティファルの家が栄えました。ところが、その妻によって告発を受け、彼は牢獄に入れられました。

そこに二年以上いました。ところが、ある時にファラオが夢を見て、その解き明かしのために牢が
出て、それを解き明かすだけでなく、七年の大豊作と、七年に大飢饉に備えて倉庫を造りなさいと
いう助言も行ないました。それで、ファラオがなんとヨセフを自分の次の権力者としたのです。

飢饉はエジプトだけでなく、その周囲全域に広がっていました。カナンの地も飢饉でした。そこで
ヤコブが兄息子たちにエジプトに行って穀物を買いなさいと命じたのです。そして兄たちがエジプト
に下って行って、そこにいたのはヨセフでした。もう話はお分かりになると思いますが、ヨセフは自
分がヨセフであることを明かすまで、いろいろ兄たちを試しました。そしてついに自分のことを明か
して、それで彼は父ヤコブに、エジプトに降りて来るようお願いしたのです。なぜなら、飢饉がな
お五年は続くからです。しかし、エジプトというところには、ヤコブの家には痛みがあります。アブラ
ハムが、かつて飢饉だったのでエジプトに下ったら、そこでサラがファラオのハーレムの中に入れ
られてしまいました。主が災いを下らせ助かりましたが、そこで女奴隷ハガイをもらったのです。し
かし、このハガイによってイシュマエルが生まれました。彼はイサクをからかいました。兄弟たちに
敵対して住む者となりました。またロトは、エジプトの豊かさに魅了されて、それで後に当時はエジ
プトのようであったソドムに住み着きました。そしてソドムに火の裁きが起こりました。

エジプトというのは、神の約束とは裏腹のところであったのです。ですから、ヤコブは葛藤しまし
た。けれども、主はヤコブに語られました。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下るこ
とを恐れるな。わたしはそこで、あなたを大いなる国民とする。このわたしが、あなたとともにエジプ
トに下り、また、このわたしが必ずあなたを連れ上る。(46:3-4)」なぜ、主はアブラハムが失敗した
ことを、敢えてヤコブに行われるのか？それは、「連れ上る」という約束にかかっているでしょう。神
は、イスラエルによってご自分の贖いの計画がどのようなものであるかを、証しされようとしておら
れるのです。神が、イスラエルのみならず、キリストを信じる者たちすべてが、世にあって神に愛さ
れ選ばれ、それで贖い出され、神の民となって約束の御国に入ることをご計画されています。私た
ちはまさに、この日本、東京やその周囲の地域にあって、そこに住み、しかし贖い出されており、
神のものとして、いつかは神によって引き出される、連れ出される者たちなのだということを知る
ことができます。

モーセは、イスラエルの息子たちの名を書き記しています。そして、その人数が七十人です。聖
書で七の数字がでると、それは神の数字、完全な数字であるということです。ところで、ステパノが、
「自分の父ヤコブと七十五人の親族全員を呼び寄せました。(使徒7:14)」と言っています。五人多
いのですが、こちらではヨセフの孫五人を加えていると考えられます。

6 それから、ヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。

ここで、著者モーセは、大きな転換を教えています。ヨセフも死にました。兄弟たちも死にました。

そしてその時代の人々も死にました。ヤコブたちがエジプトに来てから、エジプトを出て行く時まで 430 年であったことが 12 章 40 節に書いてあります。ですから、長い時を経ました。約 400 年の時を経ました。ある意味で、ヨセフやその時代の人たちの神の証しは無くなったと言ってよいでしょう。同じような期間が士師の時代にもありました。ヨシュアが死に、約四百年の暗黒時代が来て、それから預言者サムエルが建てられ、ダビデが建てられました。同じように、キリストご自身も 400 年の沈黙の後に現れました。主がユダヤ人をバビロンから連れ戻し、そして最後にマラキが預言をしてから、約 400 年後に、初めてバプテスマのヨハネが神の預言を行なって、それで初めて神の訪れが来ました。それだけの沈黙期間だったということです。

7 イスラエルの子らは多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなった。こうしてその地は彼らで満ちた。

ところが驚くことに、主はイスラエル人にご自分の手を置いていました。ここで使っている言葉は、まさに主がアダムに対して言われた言葉、そしてノアに対しても、洪水の後に言われた言葉、さらにアブラハムに対して言われた言葉です。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。(創世 1:28)」このアダムに対して言われた約束が、連綿と受け継がれて、今、イスラエルの民に実現せしめていることを見ることができます。興味深いことに、私たちは今の実際のユダヤ人の中にも、その約束が実現することを見、どんな苦難の中にあっても多くの子を生み、増えて、そして強くなっていく姿を見ます。

ここで私たちは何を学ぶことができるでしょうか？「主は、着実に事を運ばれる」ということです。主が語っておられないように見える中でも、神はご自分の事を進めておられます。私たちが何も知らないところで、また何も関与していないのに、それでも主が言われていることがそのまま実現していているということ。私たちはゆえに、信仰が必要です。ハバククのように、主が何を行なわれているのか分からないのに、「義人は信仰によって生きる」と主が語っていただきました。

3A 世の王による虐げ 8-22

1B 苦役 8-14

8 やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。

「ヨセフのことを知らない新しい王」です。歴史を紐解くと面白いことが見えてきます。エジプト人は早くから自国の歴史を書き残しています。第一王朝から第 30 王朝に至る歴史で、王の名前を抜かさずに辿っているそうです。けれども、紀元前 1770 年頃から、1580 年までは記録においては空白の期間なのだそうです。「ヒクソス」という、カナンやその周辺に生きていた雑多な人々ではないかと言われてはいますが、彼らがエジプトを占領していた時期がありました。実に、ヒクソス人によって王座が奪われた時期もあり、ようやくエジプト人の手に戻り、ヒクソス人を追い出したと

いう歴史があります。ヒクソス人はセム系の人たちなので、イスラエルの民とは同じとなります。ヨセフが統治者であった時に、ヒクソス人がファラオであった可能性があります。それで、ヘブル人に対してファラオは比較的、寛容だったのではないかとも言われているようです。しかし、「ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった」とあります。エジプト人による統治が再開したのかもしれませんが。ここで「起こった」というのは、奪取したとも訳せることのできる言葉です。

「ヨセフのことを知らない」というところには、認めない、感謝しない、全く尊重しないという意味合いが込められています。後に、モーセに対してファラオが「私は主を知らない」と言った、あの「知らない」であります。ですから、知識的に、情報として知らないだけでなく、「神などいない」とする公然の態度を取っています。私たちの生きている世界がそうではないでしょうか？「知らないよ、神のことなんか」ということでしょうか。そして、その圧力、空気は、神のものとされた民、選ばれた民であれば、大きく感じてしまうのです。それが、私たちキリスト者が、この世界に生きていて絶えず、感じていることなのです。「私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。(1ヨハネ 5:19)」

9 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民はわれわれよりも多く、また強い。10 さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くことがないように。」

今、話しましたように、彼らが恐れたのは、元々異民族であるイスラエル人が、将来起こり得るヒクソス人による戦いなどで、ヒクソス側に付き、それでこの地から出て行ってしまうことです。彼らはイスラエル人が多く、強いのを恐れていましたが、もっと恐れていたのは、出て行かれてしまうことです。彼らがいることでエジプトが豊かにされていることを知っていたのです。労働価値があるのです。つまり、彼の思惑は、「神から来る祝福は欲しいが、神は要らない」ということなのです。ラバンが、ヤコブが働いて祝福されているのを知っていました。けれども、ヤコブは嫌いでした。そのどちらも取ることはできませんよね。けれども、欲しいところだけを取りたいと思ったのです。この世は、「神の祝福は欲しいが、神はいらない」という貪欲に満ちています。キリスト教があることによって与えられる便益は欲しいが、キリスト教はお断りということです。私たちも、時に神の祝福をもとめるが、神ご自身を求めないという過ちを犯します。これは世の価値観です。

11 そこで、彼らを重い労役で苦しめようと、彼らの上に役務の監督を任命した。また、ファラオのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。

「ピトムとラメセス」は、かつてパロがヨセフを通してヤコブの家族に与えた、ナイル下流東部にあるゴシェンの地の中にあります。彼らを強く労役で抑えつけて、彼らの力を削ごうとしました。これはまさに、主がアブラハムにはるか前に予告しておられたことでした。「あなたは、このことをよく

知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものではない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。(創世 15:13)」ここに、「役務の監督を任命した」とあります。鞭を持ち、奴隷に打って、酷使していました。ファラオが持っていた銅板には、王が奴隷を鞭で打っているものが刻まれています。こうしたことを、恥ずかしげもなく描けるというところに、古代エジプトの苛酷さを物語っています。

この奴隷としての虐げと苦しみが、神の贖いの計画の原型になっています。サタンが、人を支配している時に、それは奴隷状態にしているということです。虐げます、そして神のかたちとして造られた尊厳を打ち壊します。自分で自分を滅ぼすように仕向けます。そうした状態から、キリストによって贖い出すというのが、神のご目的です。「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子の支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」

12 しかし、苦しめれば苦しめるほど、この民はますます増え広がったので、人々はイスラエルの子らに恐怖を抱くようになった。1

苦しめたら、子は増えないと思いきや、もっと増えて行きました。でも、一般の世界でも見ることはないでしょうか？先進国のような手厚い福祉があるところでは、労働環境の良いところでは、むしろ子を産まない問題があり、貧しい国では大きな家族はたくさんあります。けれども、それ以上に神は、苦しみの中でも、いやむしろ苦しむからこそ、そこにご自分の御業をさらに突き進めて、ご自分の栄光を現しておられるのです。

主が行なわれることには、「死と命」の法則があります。パウロが、激しい反対や迫害を受けている時に、神の栄光が現れる形で福音が広まっていったのですが、彼はそのことを次のように言い表しました。「Ⅱコリ 4 章 8 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」自分が押し潰されそうになる時に、その砕かれたところから主はご自身の命を注ぎ込まれます。イエス様が死に向われたからこそ、三日目によみがえることによって神の大能の力を現したように、イスラエルの民も苦しめられたからこそ、その苦しみの中から。命が現れます。

3 それでエジプト人は、イスラエルの子らに過酷な労働を課し、14 漆喰やれんが作りの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、彼らに課す過酷なすべての労働で、彼らの生活を苦しいものにした。

初めに役務者を置き、そしてファラオの倉庫を作る事業に携わらせたのですが、今は、もっと苛

酷な労働条件を付けました。漆喰と煉瓦作り、そして畑のあらゆる労働です。エジプトでは、イスラエルの民がいた頃の煉瓦も発掘されています。

2B 男の子の殺害 15-22

15 また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに命じた。一人の名はシフラ、もう一人の名はプアであった。16 彼は言った。「ヘブル人の女の出産を助けるとき、産み台の上を見て、もし男の子なら、殺さなければならない。女の子なら、生かしておけ。」

ファラオの思惑は、悪魔的なものとなります。パロは、初めはイスラエル人を何とか自分の手中で取り扱おうという程度の悪意だったでしょう。けれども、自分の手に負えないことが分かると、このように悪魔的な手段を取ります。これが霊の戦いの実態です。神に選ばれた者には、彼らの行ないに関わらず神の憐れみが置かれています。けれども、それを受け入れなければ、さらに反対を激しくします。そして、ついに人殺しという殺意にまで発展する時さえあります。イエス様がまさに、神のわざを認めなかったパリサイ人が、最後まで認めなかったので、彼らに殺意が生じ、それを実行に移したのです。

そして助産婦の名が記されています。これは、彼女たちが名誉ある働きをしたから、名を書き留められたに違いありません。マリアも、イエス様の御足に油を注いだ時に、福音が伝えられるところで、彼女の名も伝わっていくということをイエス様が言われましたが、それだけ主の御心になかった行動を取ったのです。

17 しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにほしないうで、男の子を生かしておいた。

「神を恐れ」とあります。私たちは、他の誰にも見られていなくても、一般には「これは行っても良いよ」とたとえ言われたとしても、「これはしてはいけないことではないか。」という良心があります。それは、神が私たちの良心に置いたものです。「主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。(箴言 8:13)」そして王が命じたことを行いませんでした。それは、王を尊ばないということではなく、どんな時においても神を恐れるということです。これが世の姿でしょう、私たちは絶えず恐れとの戦いがあります。キリストに命じられたことではない、反対のことは行なわせる圧迫との戦いです。人を恐れてしまえば、罠に陥ってしまうのです。神への信仰そのものが揺らいでしまいます。

信仰者が抱える問題があります。神を信じる者はすべての権威が神から来ていることを知っています。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」したがって、私たちは人間に与えられ

ている制度に従うべきであり、権威を持っている人々を敬いなさいという命令を受けています(2ペテロ 2:13-17)。けれども、この助産婦たちは王の命令に従いませんでした。それは、その命令が神に与えられた明らかな命令に反するためです。ここでは、「命を取り上げてはならない」という神の掟です。

紀元前六世紀に、バビロンにいたユダヤ人の三人は、王ネブカデネザルが立てた全身金の像を拝むことを拒みました。それは、「天地を創造された主である神以外に、他を神々としてはならない。」という掟があるからです。その時に私たちは、使徒ペテロが話した言葉を思い出す必要があります。「人に従うより、神に従うべきです。(使徒 5:29)」このような場合には、神が与えておられる権威者に対しては、その権威を敬いつつ、神ご自身の命令に従うことに集中するのです。この原則は同じように職場においても適用されます。家族においても同じです。人を恐れることとの葛藤がありますが、それでも主を選び取る時に、主が何とかしてくださいませ。

18 そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼んで言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」19 助産婦たちはファラオに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」

これが嘘であるのかどうか分かりません。この助産婦たちは、もちろん看護婦長のような存在で、自分たちの下に多くの助産婦がいたものと思われそうですが、「のろのろ作戦」を取ったのかもしれませんが、非常に遅く出て行って、病室に行ってみたらもう赤ちゃんが生まれていた、という方法を使っていたかもしれません。私たちは、こういう時に難しい選択を迫られます。ユダヤ人に対するホロコーストの時に、コーリー・テンブームの「私の隠れ家」には、ナチスに対してユダヤ人をかくまっていることを言わないでいたのですが、ある人が言ってしまいました。その人もクリスチャンでした、嘘を付くことに対して良心の咎めを感じたからです。回答はありません、けれども最善のことをその時に行うということでしょう。

20 神はこの助産婦たちに良くしてくださった。そのため、この民は増えて非常に強くなった。21 助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。

おそらく、このことがずっと続いていました。男の子がどんどん生まれて、それで非常に強くなっていきました。このようなことを行なっていれば、普通なら助産婦たちは極めて酷い状況に落とし込まれるかもしれないのに、主は良くしてくださったのです。私たちも、主を恐れる時に必ず聖霊が助けてくださいます。使徒たちの働きを見れば、使徒たちが苦しみに置かれた時に、かえって神が共におられて助けてくださり、主のことばが広がっていきました。

そして、アブラハムへの神の約束を思い出します。「あなたを祝福する者をわたしは祝福し(創世

12:3) 助産婦たちは、イスラエルの民を祝福したので祝福されました。

22 ファラオは自分のすべての民に次のように命じた。「生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない。」

ついにパロは、狂気の沙汰になってしまいました。私たちはホロコーストという惨劇を前世紀に見ましたが、すでにイスラエルの民はその民族の始まりの時から、虐殺の中で生まれてきました。そしてイスラエルのメシアである、イエス様が自身、ヘロデ大王の手によって殺されかけ、実に二歳以下のベツレヘムの子たちが虐殺されました。ここの「すべての民」とはエジプト人のことです。ここの箇所は、エジプト人に対して、ヘブル人の男の子を見つけたらナイル川に投げ込みなさい、という命令です。つまり監視制度を設けたのです。互いに監視して、連帯責任にして、通告しなければ罰するようになりました。けれども、主が共におられます。主はナイル川の水からモーセを救い出す奇跡を行なわれます。かつてノアの時代も、水から箱舟によって救い出されましたし、そしてそれはバプテスマの型であるとペテロは言いました。私たちは、自分に死んでしまうところを経て、しかしだからこそ、神の救いを知ることのできるものとしてくださいました。

ところで、出エジプト記の話を先に進めると、パロはエジプト軍と共に紅海の水の中で溺れ死ぬ運命を辿ります。イスラエルの民を水の中で殺すという呪いを与えたので、自分たちが水の中で溺れ死ぬという呪いを受けたのです。アブラハムに対する約束、あなたを呪うものをわたしは呪う、ということも、こういう形で実現していきます。神は、救いだけでなく裁きにおいても、真実な方であることが分かります。私たちがこの世においてキリストの証し人となるということは、ある人には救いをもたらす、他の人には残念ながら滅びをもたらす印となっていくということです。